

地域おこし協力隊の活動紹介

☎ SDGs移住定住推進課 (内線4224)

地域おこし協力隊とは三大都市圏などに住む人材を受け入れ、地域協力活動を行ってもらい、将来的には石巻への定住・定着を図る国の事業です。市では既に28人を委嘱し、退任した16人のうち、13人が市内での就労または定住に繋がっています。各隊員の活動内容などを紹介します。



二地域居住等推進コーディネーターとして活動して2年目になります。「二地域居住」とは、都市部と地方の2つの地域に拠点をもちながら暮らすライフスタイルです。

昨年は、自身のこれまでの繋がりや口コミを通じて、全国から20組・延べ64人の方に石巻を訪れていただきました。

また、日本笑い学会石巻支部の協力のもと、上方落語家・四代桂小文枝師匠による、能登半島地震の被災地支援を目的とした落語会を開催しました。

今年は、石巻で「住む」「働く」を体験できるモニターツアーの実施、大都市圏における周知イベントなどを通じて、石巻と継続的に関わる人を増やす取り組みを進めています。



- 隊員プロフィール 氏名 澤野 真 任期 令和7年6月1日~(最大3年間) 出身 兵庫県神戸市(転出元:兵庫県姫路市)
- 前職 姫路市職員 ■主な活動内容 二地域居住の推進による関係人口の創出
- 隊員になったきっかけ 姫路市職員として被災地支援をスタートに公私ともに多くの石巻の人との関わりができ、石巻の魅力にはまったことがきっかけです。

おらほの博物館!



石巻ハリストス 正教会のイコン

明治初期の石巻のハリストス正教会の信徒が使用していたイコン(聖画像)です。

イコンとは、祈りや瞑想の際に使用するハリストス正教会にとって重要な道具で、今回紹介するイコンに描かれているのは、聖母マリアとイエス・キリストです。このイコンを所持していたのは、石巻で最初にハリストス正教会の洗礼を受けたとされる伊藤忠右衛門という石巻の商人で明治10年(1877年)頃に入信したとされています。伊藤は、石巻の最初期のハリストス正教会の信徒として活動し、現在、中瀬にある石巻ハリストス正教会教会堂の建設にも携わりました。イコンの金型には「A.C.1868」と刻印されており、その頃に制作されたと考えられます。

本資料は、私設の展示施設「梅園文庫」から寄贈を受けた資料の1つです。「梅園文庫旧蔵資料」には、本資料の他にもハリストス正教会関係の書籍などが残されているため、明治初期の石巻のハリストス正教会の様子を伝える資料群といえます。

今回紹介するイコンを含め、「梅園文庫旧蔵資料」の石巻ハリストス正教会関係の資料を、石巻市博物館で現在開催している企画展「[民権]の時代・[普選]の時代」で展示しています。明治初期に宮城県に根付いたハリストス正教会は、旧仙台藩士による自由民権運動にも関わりを持ちました。企画展では、石巻だけでなく、旧仙台藩士とハリストス正教会の関係などについても解説します。

☎ 石巻市博物館 98-4831



文化財説明板「水沼古窯跡」

(文化財) たんぽう

133

文化財説明板「水沼古窯跡」の設置

石巻市教育委員会生涯学習課

市の歴史や文化を考える上で重要な「文化財」は、市内の各所にあります。こうした文化財を広く知ってもらうために、文化財標柱と文化財説明板の設置をしています。

今回は水沼に新設した「水沼古窯跡」を紹介します。水沼古窯跡は、過去に行われた発掘調査の結果、十二世紀中期に陶器を生産した遺跡であるということが分かってきました。発見された陶器は、渥美焼に見られる袈裟襷(せうさたす)文という特徴的な文様が付けられていたことから、平泉藤原氏の影響の下、渥美半島(愛知県

南端)の陶器工人が水沼に招かれ(あるいは連れて来られ)、陶器の生産を行っていたと推測されています。

水沼産の陶器は、宮城・岩手・青森県の遺跡からも発見されていることから、威信材の性格を有し、北上川舟運により各地に供給されていた可能性が高く、石巻から太平洋や北上川を介した文化の広がりが見えてきます。

市内には水沼古窯跡のほかにもたくさん文化財があります。文化財標柱や文化財説明板を見かけた際にはぜひ足を止め、石巻の歴史を感じてみてください。

※市内の文化財標柱・説明板の中には、経年劣化などにより、文字が薄くなっているものがあります。順時修繕対応していきます。